HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	奇門遁甲の基礎的研究
Author(s)	猪野, 毅
Citation	研究論集, 10, 161-185
Issue Date	2010-12-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44606
Type	bulletin (article)
File Information	INO.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

奇門遁甲の基礎的研究

猪　野　　毅

要　旨

小論は，山川九一郎著の『奇門遁甲千金書』という書を解読するために，まずその前提として「奇門遁甲」の基本的な概念や考え方について，まとめようと試みるものである。

『四庫全書総目』子部･術数類の中に挙げられている奇門遁甲に関係する文献には，『遁甲演義』二巻，『奇門遁甲賦』一巻，『黄帝奇門遁甲図』一巻，『奇門要略』一巻，『太乙遁甲専征賦』一巻，『遁甲吉方直指』一巻，『奇門説要』一巻，『太乙金鏡式経』十巻，『六壬大全』十二巻。また，『古今図書集成』や『隋書』経籍志にも遁甲の書が見える。

「遁甲」なる言葉は，史書においては『後漢書』方術伝・高獲伝・趙彦伝に初めて見え，また『陳書』『魏書』『北斉書』『南史』などにも「遁甲」の名称が見える。日本でも『日本書紀』推古天皇十年（602）条に「遁甲」が伝来したことが見える。

『遁甲演義』・『奇門遁甲秘笈大全』などにより奇門遁甲の基本概念を考えると，甲を除いた乙・丙・丁を「三奇」とし，戊・己・庚・辛・壬・癸を「六儀」として，八卦の入った洛書九宮の枠に組み合わせ，その他，休，生，傷，杜，景，死，驚，開の「八門」，直符，螣蛇，太陰，六合，勾陳，朱雀，九地，九天の「八神」（あるいは太常を入れて「九神」），また天蓬星・天任星・天冲星・天輔星・天英星・天芮星・天柱星・天心星・天禽星の「九星」を並べて「遁甲盤」を作り上げ，占う年月日時を六十干支で表し，「天の時」「地の利」「人の和」に基づいて占いを行う。その占い方には，洛書九宮の八枠を円盤に見立てて回転移動させる排宮法と，洛書九宮の数の順序通りに移動させる飛宮法があり，山川九一郎『奇門遁甲千金書』の占い方は排宮法を用いている。

遁甲盤を並べ終えたら，それぞれ九星・八門・八神（または九神）などの表す意味や，相互の影響を考えて，吉凶を判断する。

奇門遁甲は方位学（空間の学，洛書学）であり，干支学（時間の学，暦学）でもあるので，奇門遁甲は時間と空間を統合した術数の学と言える。さらに，空間を洛書に従って九つに分け，時間を六十干支に従って六十に分割し，独

自の世界観を構築している。また，九神・九星が天，九宮が地，八門が人という，「天・地・人」をイメージした世界を構成している占術なのである。

はじめに

「奇門遁甲」という占術に出会ったのは，今から十五年ほど前に京都に旅行した際に，山川九一郎著『奇門遁甲千金書』という本を古書店で発見し，購入したことに始まる。調べてみると，この書は国立国会図書館にも所蔵されており，そこでは明治時代の奇門遁甲関係書は四点確認できるが，この書はその内最も古いものである(明治十五年発行)。また，江戸以前のものは今のところ確認できない。解読を始めてみると，この書は精々十三丁に過ぎない小冊子で，記述が簡略すぎて奇門遁甲の占い方に不明な点が多かった。そこで中国・台湾の書籍としては宏業書局印行『奇門遁甲全書』，王居恭著『術数入門 ── 奇門遁甲与京氏易学』(21 世紀易学家書系，華齢出版社，2009 年 3 月）及び劉波・張文主編『四庫術数類大全』の中の傅達先編撰『奇門遁甲術』(海南国際新聞出版中心･海南出版社，1993 年 9 月）等を参考にし，日本の書籍としてはどの本が有用か判断しづらいが，『奇門遁甲学入門』(武田考玄著，秀央社，1995 年）と『奇門遁甲原理口訣』(青龍隠士著，中村文総校訂，悠久書閣，1982 年)を参考にすることとした。小論は，奇門遁甲の基本的な考え方を明らかにしようとするものである。

1　文献としての奇門遁甲

『四庫全書総目』子部･術数類の中に収められている，奇門遁甲に関係する文献には，以下のようなものがある。

『遁甲演義』二巻　『四庫提要』に次のように云う。

> 『遁甲演義』二巻は，明の程道生の著したものである。程道生は，字は可生，海寧の人である。遁甲を言う人は，洛書が祖であると言うが，河図は図を以て名と為すので，奇数偶数の象があるはずであり，洛書は書を以て名と為すので，文字の形があるはずだ。故に班固は洛書が六十五文字であり，劉向は三十八文字であり，劉欽は二十字であるとするのは，いずれも漢以前の洛書には図がなかったという証拠である。もし宋以後に伝わる四十五点[1]の状態で，河図と異ならないなら，まさに「洛図」と名づけるはずで，「洛書」と名づけるはずがない。『大戴禮記』の記載によれば，明堂の古制には「二九四七五三六一八」の文があり，九宮の法はこれから始まっている。しかるに『易緯乾鑿度』に載せる「太乙行九宮」が最も詳しい。遁甲の法は実際はここから始まる。方技家はその源を求めるのを知らない

[1] 一から九までの数字を，点の数で表していることをいう。

ので，みだりに仮託するのである。その法は九宮を本となし，その緯は三奇・六曜・八門・九星によって，加臨[2]の吉凶を見て進退を決める。日は乙に生じ，月は丙に明らかになり，丁は南極であり，星の精である。ゆえに乙・丙・丁は奇と言われる。甲はもとは諸陽の首（はじめ）であり，戊以下の六儀はそれぞれに分かれて甲 X に配される[3]。そして三奇・六儀を九宮に配して直符・直使を起こす。だから遁甲と呼ぶのである。

その離から坎までが宮に分かれ，正授，超神，閏奇，接気は暦律に通じる。開門（・休門）・生門が北方の三向を取るのは，太乙に通じる。龍虎蛇雀，刑囚旺墓の意味が乗承生克に他ならないのは，六壬星命に通じる。天文・纖緯の学にいたっては，備わらないことがない。

ゆえにその説を神妙なものと見る者は，黄帝・風后および九天元女に由来すると考える。その根拠は，論ずるまでもなく，方技の中に求めるのが最も理にかなっている。『漢書』藝文志に列する所を参考にすると，ただ『風鼓六甲』と『風后孤虚』しかない。奇門遁甲については，明文すらない。梁の簡文帝の楽府に至って，初めて「三門，遁甲に應ず」の語が出てくる[4]。『陳書』呉明徹伝にいたって，遁甲の名がついに歴史書に現れた[5]。つまり，その学はおそらくは南北朝期に盛んであったろう。『隋書』経籍志には，「伍子胥遁甲文」（『新唐書』藝文志も同じ），「信都芳遁甲経」（『新唐書』藝文志も同じ），「葛秘三元遁甲図」（『新唐書』藝文志「葛洪三元遁甲図」）などの十三家が載っている。その文章は世にほとんど残っていない。唐の李靖には『遁甲万一訣』があり（『旧唐書』経籍志），胡乾には『遁甲経』（『郡斎読書志』後志巻二）があり，ともに歴史書に見える。宋代にその説を伝える者はますます多くなった。仁宗の時代に，嘗て勅命によって『景祐楽髄新経』を修めさせ，七宗二変を述べ，古今の楽を合わせ，六壬・遁甲をも参照した。また司天正の楊維徳は『遁甲玉函符応経』を撰し，自ら序文を作った。その当時，六壬・遁甲の学問は，最も盛んであった。命数を語る者は，今に至るまで多く此の書を引用する。不思議なことを好む者が兵を語ることに引用して以来，遂に靖康の時には郭京[6]等の輩が，怪しい妄説で国を誤らせた。後の人はまた，道家の符籙の法を混ぜたので，ますます怪しい妄誕の説となり，根拠

---

2 『煙波釣叟歌』に，「奇與門兮共太陰。三般難得共加臨」とある。加臨とは，A の場所に B が揃うことをいう。

3 『奇門遁甲大全』の「六儀三奇」に，「甲子戊，甲戌己，甲申庚，甲午辛，甲辰壬，甲寅癸，星奇丁，月奇丙，日奇乙」とある。

4 『玉台新詠』梁簡文帝「雑句從軍行一首」に見える。

5 『四庫提要』には「『陳書』武帝紀」とあるが，『陳書』呉明徹伝に，「高祖為之降階，執手即席，與論當世之務。明徹亦微渉書史經傳，就汝南周弘正學天文・孤虚・遁甲，略通其妙」とある。

6 郭京は，『續資治通鑑長編』巻百三十一によると，「陰陽・天文・地理・遁甲・占射の諸家の説に通ず」とある。

を求めることすらできなくなった。そこで六壬が流行し，遁甲の学はほとんど廃れた。しかし，遁甲は六壬に通じ，六壬は人事において密接であり，遁甲は天文において優れており，実際にはどちらが優れているか，甲乙を付けることはできない。

世に伝わる所の『奇門遁甲五総亀』，『煙波釣叟訣』には，その梗概が残っている。しかるにこれらの編の要旨は簡約にして欠けた所がなく，奇を用い閏を置くの要については，とても詳しい説明が備わり，自分の干支の年・年齢を論ずるに至っては，本局中の吉星の生・旺に乗じようとする。その説もまた，他書がまだ及ばない所である。これを保存して三式[7] の一つに備えることも，また五行家の廃しない所であろう。乾隆四十六年十月に恭しく校正しおえる。

『奇門遁甲賦』一巻　『四庫提要』によれば，著者は不明。焦竑の『経籍志』によれば，遁甲書の七十二家の内，賦を名前にするのは宋邱濬の『天乙遁甲賦』及び員卓の『遁甲専征賦』のみである。これは奇門のみを論じ天乙に及ばず，また用兵をつかさどらず，殆ど濬や卓の遺本ではない。しかし，その言葉や意味が簡明で，荒唐無稽には至っていない。巻末に『煙波釣叟歌』を附している。

『黄帝奇門遁甲図』一巻　『四庫提要』によれば，著者は不明。載せているものは陰陽十八局及び入門の凡例のみで，そのほかは詳らかではない。

『奇門要略』一巻　『四庫提要』によれば，著者は不明。大部分は『奇門五総亀』の説を拾い集め，やや解釈を加えている。奇・門・使を得ることにおいては，少しも独創性がない。超神・接気についても言及がない。しかし宋の平章趙公（趙普）の伝を得たとし，巻末に劉基・徐達を引いて，その術を神秘的なものにしようとしているが，これは術数家の妄誕の習いであって，確かめることはできない。

『太乙遁甲専征賦』一巻　『四庫提要』によれば，著者は不明。焦竑の『経籍志』によれば，明の員卓に『遁甲専征賦』があり，その名前はこれと合っている。或るものはこれは員卓の書であると云い，或るものは後人の偽作であると云い，詳しいことは分からない。この書は遁甲を使って行軍趨避の用を論じ，『煙波釣叟歌』の中の意の他に，別に新たな考え方はない。その上太乙を名前につけているのに，編中に一語として太乙・九宮・計神・主客に言及するものがないのは，もっとも不可解なことである。

『遁甲吉方直指』一巻　『四庫提要』によれば，明の王巽の撰である。巽は自ら秦台子と号し，蘭陽の人である。官は欽天監五官司暦に至る。この書は前に自序があり，永楽中に上が北京に巡守し，大統・壬遁・暦書を増すに，巽及び冬官正の皇甫仲及び霊台郎の湯銘等に命じて遁甲を推演させ，もろもろの凶時を削り，専ら吉門に注して利用した。よって編集してこの本を作った。思うに壬遁暦の略例である。しかし術数家は趨も避も主とするので，避ける所が不明なま

---

[7] 遁甲・太乙・六壬の三つのこと。

まで，吉を得ることができるというものはない。特に専ら吉方を選んで効用を求めるのは，古法とは違う。

『奇門説要』一巻　『四庫提要』によれば，明の郭仰廉の編である。この書は陰陽十八局の起例立成の説に即していて，別に要旨はない。思うに諸書より写し取って成ったものであろう。

『太乙金鏡式経』十巻　『四庫提要』に次のように云う。（一部省略）

『太乙金鏡式経』は唐の王希明の著したものである。希明は，その本籍がはっきりとしないが，開元の時に，方技をもって内供奉となり，待詔翰林となる。この本は，つまりは勅命を奉じて編纂したものである。『新唐書』藝文志に見える。故に本の中では，多く自ら臣と称している。太乙の積年の推算が，宋の景元年間に至るものがままあるが，それは後人が増して入れたもので，希明の作ではない。

『史記』の日者伝には術数の数家があるが，太乙家がその第一である。『史記』天官書の中宮には天極星があり，その一つの明るいものには，いつも太乙が居る，となっている。また封禅書には，亳人の謬忌の奏祠に太一方があり，天神の貴いものを太一と名づけた。鄭玄は，北辰の神の名と考えた。またあるものは，木神と考えた。だが屈原の『九歌』にもまた「東皇太一」と称したので，戦国時代からこの名があったと言うことになる。漢志には，五行家に泰一陰陽二十三巻があり，まさに太乙家の本であるが，すでに失われ，伝わってはいない。

ただ『周易乾鑿度』のみに太乙行九宮法があり，今に伝わる順序は，すなわち特に右回りは，乾・巽を一・九とする。希明は，「太乙は未来を知るゆえに，聖人がこれをなす。一の位を選ぶことで，予知の意味を示す。」と言う。郭璞はすなわち「地は東南に欠けるがゆえに，九を選んでこれを埋める。」という。楽産はまた「太乙の理は，後王が得て，それで天下を統一するがゆえに，一を選んで乾に就く。」と言う。その説はすこぶる不揃いで，皆こじつけに近く，故に黄宗羲は「全てが混交し，行いが信用が無く，思うに術家にはまた，流れの乱れるところがある。」と，たいそうそしった。その要旨を調べると，易・暦に倣って作ったものである。

それは一を太極とし，これによって二目を生み，二目は四輔を生む，これは易の両儀・四象のようである。また計神と太乙とを合わせて八将とするのは，ちょうど易の八卦のようなものである。その年，月，日，時を大綱として，八将を横糸とし，三基，五福，十精の類を縦糸とするのも，また暦のようなものである。その方法は，八将でその掩・迫・囚・撃・関・格の類を推し，内外の災いや幸いを占う。また四神の臨むところの分野は，水旱・兵喪・飢餓・疾疫を占う。また三基・五福・大小游の二限，易卦の大運を推して，古今の治乱を占う。

術士が伝習することは，由来がとても長い。故に『漢書』にはすでに「陽九・百六」の語がある。『南齊書』の高帝紀の賛に引く所の太乙九宮占には，漢の高祖五年より推して，

宋（陳か）の禎明元年に至るまで，およそ数百年であるとしている。しかしてその術は，とうとう大いに世に顕れた。希明が詔を承けるまで，編纂して校正する年月は多く，ますます内容が詳しく備わるようになった。李燾の『続通鑑長編』を見ると，「夏の国主元昊は外国や中国の文字に通じ，嘗て太乙金鑒を推す」と言う。すなわち，この本はかつて外国の地に行われたのである。…(後略)…

『六壬大全』十二巻　『四庫提要』に次のように云う。(一部省略)

『六壬大全』十二巻は，その撰者の姓名がわからない。巻首に懐慶府の推官郭載騂が校勘したと題してあり，思うにこの本は明代の刊本である。

六壬と遁甲・太乙は世に三式と言う。そして六壬が，その伝承が最も古い。或るものは黄帝・元女に由来すると言うが，もとよりその根拠は求めようもない。だが，その術としては，後世の方技家がよく創造できるものではない。大抵は数は五行を根拠とし，五行は水に始まり，陰を挙げて陽を起こすので，故に壬を称賛する。成数を挙げて生数を備えるので，故に六を用いる。それには天盤・地盤と神将とが加臨することがあり，やや奇門遁甲・九宮の式に近いといっても，干支によって四課があるのは，すなわち，両儀・四象である。発用によって三伝があるというのは，すなわちまた，一は二を生じ，二は三を生じ，三は万物を生ずることである。六十四課に至っては，もとより伏羲の爻に基づかないことはない。思うにこれもまた易象の支流であり，推衍するものである。…(中略)…

六壬の書が歴史書に見えるのは，隋志に二家あり，唐志に六家あり，宋志には三十家，そして焦竑の『経籍志』に列する者は多く八十三家に至るが，その多くは散逸して今に伝わらない。現存するのは，徐道符の『心鏡』，蒋日新の『開雲観月歌』，凌福之の『畢法賦』及び『五変』・『中黄』である。…(中略)…

この本は諸書の遺文を総集し，初めに手法，総鈐及び貴神・月将・徳煞・加臨・喜忌を記載し，唐以来の緒論をあまねく取り入れている。…(中略)…

『明史』藝文志を案ずるに，袁祥の『六壬大全』三十三巻を載せるが，名前は同じでも巻数が符合しないので，この『六壬大全』が必ずしも祥の編集したものとは限らない。

それが博綜簡括であるというのは，もとより六壬家の総集であるからだ。ただ六壬の重んじるところは，天乙貴神に過ぎず，陰陽・順逆は吉凶の拠り所であり，大工の物差しやコンパスのようなものである。そして，先天の徳は子に始まり，後天の徳は未に始まり，五干の徳で神を合わせて貴を取る。…(後略)…

奇門遁甲の著述は，また『古今図書集成』にも見える。ただし，そこに収集されている奇門遁甲は，その摘要のみであり，『煙波釣叟歌』『景佑遁甲符応経』などがある。

なお，『隋書』経籍志には，次のような書目が列挙されている。

黄帝陰陽遁甲六巻

遁甲決一巻　呉相伍子胥撰。
遁甲文一巻　伍子胥撰。
遁甲経要鈔一巻
遁甲万一決二巻
遁甲九元九局立成法一巻
遁甲肘後立成嚢中祕一巻　葛洪撰。
遁甲嚢中経一巻
遁甲嚢中経疏一巻
遁甲立成六巻
遁甲叙三元玉暦立成一巻　郭弘遠撰。
遁甲立成一巻
遁甲立成法一巻　臨孝恭撰。
遁甲穴隠祕処経一巻
黄帝九元遁甲一巻　王琛撰。
黄帝出軍遁甲式法一巻
遁甲法一巻
遁甲術一巻
陽遁甲用局法一巻　臨孝恭撰。
雑遁甲鈔四巻
三元遁甲上図一巻
三元遁甲図三巻
遁甲九宮八門図一巻
遁甲開山図三巻　栄氏撰。
遁甲返覆図一巻　葛洪撰。
遁甲年録一巻
遁甲支手決一巻
遁甲肘後立成一巻
遁甲行日時一巻
遁甲孤虚記一巻　伍子胥撰。
遁甲孤虚注一巻
遁甲九宮亭亭白姦書一巻
遁甲三巻　梁有遁甲経十巻，遁甲正経五巻，太一遁甲一巻，亡。
遁甲要用四巻　葛洪撰。
遁甲祕要一巻　葛洪撰。

遁甲要一巻　葛洪撰。

遁甲三十三巻　後魏信都芳撰。

三元遁甲六巻　許昉撰。

三元遁甲六巻　陳員外散騎常侍劉毗撰。

三元遁甲二巻　梁太一遁甲一巻，遁甲三元三巻。

三元九宮遁甲二巻　梁有遁甲三元三巻，亡。

三正遁甲一巻　杜仲撰。

遁甲三十五巻

遁甲時下決三十三巻

陰陽遁甲十四巻

遁甲正経三巻　梁五巻。

遁甲経十巻

遁甲開山図一巻　梁遁甲開山経図一巻。

遁甲九星暦一巻

遁甲三奇三巻

遁甲推時要一巻

遁甲三元九甲立成一巻

雑遁甲五巻　梁九巻。遁甲経外篇一百巻，六甲隠図并遁甲図二巻，亡。

陽遁甲九巻　釈智海撰。

陰遁甲九巻

余嘉錫の『古書通例』に次のように云う。「『隋書』の十志はもと『五代史』のために作られたものだが，その編は『隋書』に編入され，俗に『五代史志』と呼ばれる。六朝以前の目録書はみな滅び，わずかにこの「経籍志」だけがその大略を示している。故に古書を読むものは必ずこれに材を取る。」『隋書』の十志は，梁・陳・斉・周・隋の各書にはみな志がないので，太宗が詔して『五代史志』を編集させ，『隋書』に編入させた。「経籍志」は後漢に溯る，千年来の名賢の著述を網羅しており，後の人が図書の存失の痕跡を探し出す場合，文献を捜索するのにとても便利である。奇門遁甲の研究成果及びその発展は，これらの目録からもその概要を知ることができる。（これは王居恭前掲書にも，既に指摘する所である。）

2　奇門遁甲の概要

⑴　沿革の概要

すでに見たように，隋の時代に遁甲の書目がたくさんあるということが分かる。そこから，当時，遁甲が相当に流行したであろうことが推測できる。

隋の時代にすでにこれだけのものがある遁甲は，いつ頃始まったのであろうか。

『奇門遁甲術』（前掲）の「奇門遁甲概述」（p 1～p 12）と「奇門遁甲の基本知識」（p 262～p 293）を参考にして，適宜日本への伝来の状況などを補足しつつ，起源と沿革の概要をまとめると，以下のようになる。

遁甲の学の発生は，古代の兵法や行軍・布陣と密接な関係があり，その後次第に，社会生活の中で吉日・吉方を選ぶという趨勢に傾いていった。それゆえに，奇門遁甲の学の中には，兵陰陽[8]の残存が少なからずある。後世の伝説によれば，中国の歴史上で，遁甲にかかわる二人の軍師は，張良と諸葛亮である。

張良については，司馬遷の『史記』留侯世家の中に「學者，鬼神無きを言ひ，然るに物（神異の物）有りと言ふこと多し。留侯の見る所の老父予ふるの書の如きに至りては，亦怪しむべし。高祖困に離（あ）ふこと數にして，留侯常に功力有り，豈に天に非ずと謂ふべけんや。」とある。この中の「老父の予ふる書」とは，黄石公が張良に与えた『太公兵法』を指すが，実際には奇門遁甲の書と伝えられる。また諸葛亮については，唐代の詩の中に多く描かれている。杜甫は「功は蓋（おほ）ふ三分の國，名は成る八陣の圖」（杜甫「八陣圖」）と詠み，杜牧は「東風は周郎に便を與へず，銅雀の春は深く二喬を鎖（とざ）す」（杜牧「赤壁」）と詠み，羅隱は「時來たれば天地は皆同力し，運去れば英雄自由ならず」（羅隱「籌筆驛」）と詠んでいるので，遅くとも漢・唐の時代には，奇門遁甲の始まりがあったと見られる（前掲『奇門遁甲術』，p 1～p 4 参照）。しかし，二十四史の『後漢書』方術伝には，「其の流には，又風角・遁甲・七政・元氣・六日七分・逢占・日者・挺専・須臾・孤虚の術有り。」とあり，注に「遁甲は六甲の陰にして隠遁するを推すなり。」と云う。また同高獲伝に，「天文を善くし，遁甲に暁らかにして，能く鬼神を役使す。」とあり，また同趙彦伝に，「彦，遁甲を推し，時を以て兵を進むるを教ふ。」とあるので，「遁甲」という名稱は『後漢書』成立の南朝宋（420-479）以降のものとなろう。またそれ以降，『陳書』『魏書』『北斉書』などにも「遁甲」の名称が見え，『南史』陳武帝紀の中の記載にも，「（帝）文籍を渉獵し，好みて兵書を読み，緯候・孤虚・遁甲の術に明るし」とあり，また呉明徹伝にも「汝南の周弘正に就き，天文・孤虚・遁甲を学び，略其の術に通ず。」とある。

日本においては，『日本書紀』推古天皇十年（602）条に，「冬十月，百済の僧，観勒（おもむ）来けり，仍（よ）りて暦の本及び天文・地理の書，并びに遁甲・方術の書を貢（たてまつ）る。是の時に，書生三四人を選びて，観勒に学び習はしむ。陽胡史（やごのふびと）の祖玉陳（おやたまふる），暦法を習ふ。大友村主高聡（おおともものすぐりかうそう），天文・遁甲を学ぶ。山背臣日立（やましろのおみひたち），方術を学ぶ。皆学びて業（みち）を成しつ。」とある。これによれば，遅くとも 602 年までには「遁甲」が日本に伝わったことがわかる。中国ではちょうど隋の時代であり，前章「1　文献としての奇門遁甲」に挙げた『隋書』経籍志の中の「遁甲」に関係する書物も伝来したであろう。また同天武天皇上・即位前紀条に「幼（わか）くましましし時には大海人皇子（おほしあまのみこ）と曰す。……　壮（をとこざかり）

[8] 鄭樵の『通志』芸文略の諸子類にある。

に及(いた)りて雄抜(をを)しく神武(たけ)し。天文・遁甲に能し。」とあり，同天武天皇上・元年（672）六月条に「横河に及(いた)らむとするに，黒雲有り。広さ十余丈にして天に経(わた)れり。時に，天皇異(すめらみことあやし)びたまふ。則ち燭を挙(ささ)げて親(みづか)ら式(ちく)を秉(と)りて，占ひて曰はく，天下(あめのした)両つに分れむ祥(さが)なり，然れども朕(われ)遂に天下を得むかとのたまふ。」とある。これによれば，天武天皇自身が「遁甲」に通じ，自ら式盤を操作したらしい。（以上『日本書紀』の訓読は，坂本太郎等校注，『日本書紀』（一）～(五)，岩波文庫による。）

(2)　奇門遁甲で用いる基本概念

奇門遁甲の概念を知る上で基本的な文献としては，明代の程道生撰『遁甲演義』と，明代の劉伯温に仮託された『奇門遁甲秘笈大全』が挙げられる。

また，王居恭著『術数入門 ── 奇門遁甲与京氏易学』（前掲）及び劉波･張文主編『四庫術数類大全』の中の傅達先編撰『奇門遁甲術』（前掲）を参考にした。これらに基づいて基本的な概念を説明する。

甲，乙，丙，丁，戊，己，庚，辛，壬，癸を「天干」と，子，丑，寅，卯，辰，巳，午，未，申，酉，戌，亥を「地支」と言い，天干と地支を合わせて六十干支を作り，年・月・日・時の順序を表示するのに使い，一巡して又元に戻り，循環して使用する。その中の奇数番目の干と支の対は「陽」に属し，偶数番目の干と支の対は「陰」に属する。このうち「甲」は一つの重要な節目であると考えられていたので，この六十干支の中で，①甲子⑪甲戌㉑甲申㉛甲午㊶甲辰㊿甲寅の六つは，それぞれ十を単位とする一組の頭で，「陽」に属し，六十干支中に「甲X」が六回現れるので，古人はこれを「六甲」と称し，尊んで「諸陽の初め」として，主宰となる位置に置いた。しかし，奇門遁甲の推演の中で，「六甲」は隠れて現れないで，支配の作用が生じる。『後漢書』方術伝に「其の流には，又風角・遁甲・七政・元氣・六日七分・逢占・日者・挺専・須臾・孤虚の術有り。」とあり，注に「遁甲は六甲の陰にして隠遁するを推すなり。」と云う。これが「遁甲」という言葉の由来を表していると思われる。要するに「遁甲」とは，六甲が隠遁している占いなのである。

十個の「天干」の中の「甲」が隠遁した後，乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の九つの天干が残るが，その中の乙・丙・丁の三つを，昔の人は「三奇」と称し，戊・己・庚・辛・壬・癸を「六儀」と称した。「三奇」「六儀」というこの九つの符号（九干）は，ちょうど洛書の中に配置する事ができる。「甲子」は「戊」に遁れ（「甲子」は「戊」の中に隠れているの意，以下同じ），「甲戌」は「己」に遁れ，「甲申」は「庚」に遁れ，「甲午」は「辛」に遁れ，「甲辰」は「壬」に遁れ，「甲寅」は「癸」に遁れ，「六儀」はそれぞれ「六甲」の支配を受けている。「儀」とは「象」（物象・意象）の意味で，たとえば「戊」は「甲子」の象である。これが「六儀」と呼ばれる所以である。「乙」「丙」「丁」には「甲」が遁れない。「奇」とは「神奇･奇異･妙用」の意味で，具体的には「乙」が日奇，「丙」が月奇，「丁」が星奇であり，これが「三奇」

と呼ばれる所以である。

戊一	**甲子**	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉
己一	**甲戌**	乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰	辛巳	壬午	癸未
庚一	**甲申**	乙酉	丙戌	丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰	癸巳
辛一	**甲午**	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥	庚子	辛丑	壬寅	癸卯
壬一	**甲辰**	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌	辛亥	壬子	癸丑
癸一	**甲寅**	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥

「奇門遁甲」は，三奇六儀が洛書九宮と合わさり，動きを造り出すものである。奇門遁甲は，洛書九宮を枠組みとし，十八の地盤，すなわち十八の座標系を構成する。または十八局（陰遁九局，陽遁九局）とも称す。ここでは洛書九宮は方位，すなわち四正・四隅を表示し，これが奇門遁甲の空間となる。局の構造は，甲を除く九干を順序よく洛書九宮の中に布き並べる。

例えば，陽遁一局の地盤における九干の配置は，次のようになる。

洛書の順序	1	2	3	4	5	6	7	8	9
九干	戊	己	庚	辛	壬	癸	丁	丙	乙

4 辛	9 乙	2 己
3 庚	5 壬	7 丁
8 丙	1 戊	6 癸

また，陰遁九局の地盤における九干の配置は，次のようになる。

洛書の順序	1	2	3	4	5	6	7	8	9
九干	乙	丙	丁	癸	壬	辛	庚	己	戊

4 癸	9 戊	2 丙
3 丁	5 壬	7 庚
8 己	1 乙	6 辛

地盤の構造はとても簡単で，九干は，九つの順序の符号であり，洛書九宮に布き並べる。陽局の順番は，「戊己庚辛壬癸丁丙乙」であり，陰局の順番は，陽局の逆順で「乙丙丁癸壬辛庚己戊」となる。それぞれの順番が一巡すると陰陽の十八局となる。奇門遁甲の書は全て陽遁の九

局を「順布六儀・逆布三奇」と言い，陰遁の九局を「順布三奇・逆布六儀」と言う。

地盤に使われる洛書九宮の図（下図）の源流は，北極星を神格化した太一（太乙）に八卦の宮殿を巡らせていく法，すなわち太一九宮法である。文献的初出は漢代の『易緯乾鑿度』とその鄭玄の注である。その図は，洛書と文王八卦方位（後天図）とを組み合わせたものである。（三浦國雄『易経』「易用語解説」，「太一九宮法」の項，角川書店，1988 年，55 頁を参照。）

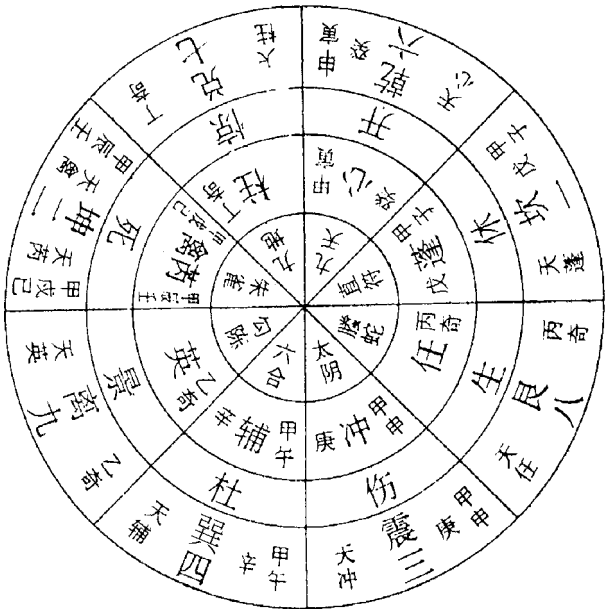
洛書九宮図（太一下行九宮図）

巽 四	離 九	坤 二
震 三	中 五	兌 七
艮 八	坎 一	乾 六

六十干支が時間の順序を表示するためのものならば，八卦は空間の方位を表示するためのものである。例えば，「震」は東方を表し，「巽」は東南を表し，「離」は南方を表し，「坤」は西南を表し，「兌」は西方を表し，「乾」は西北を表し，「坎」は北方を表し，「艮」は東北を表す。これは「八卦」を「洛書九宮」に重ね合わせ，遁甲に地理（方位）の要素を加えたことになる。

そのほかに，人事の特徴と互いに対応させた休，生，傷，杜，景，死，驚，開の「八門」や，直符，螣蛇，太陰，六合，勾陳，朱雀，九地，九天の「八神」，坎一宮（冬至，小寒，大寒），坤二宮（立秋，処暑，白露），震三宮（春分，清明，穀雨），巽四宮（立夏，小満，芒種），乾六宮（立冬，小雪，大雪），兌七宮（秋分，寒露，霜降），艮八宮（立春，雨水，驚蟄），離九宮（夏至，小暑，大暑）の「八節」，つまり二十四節気を分けて八つにしたもの，また天蓬星・天任星・天冲星・天輔星・天英星・天芮星・天柱星・天心星・天禽星の「九星」がある。これらの多くの天時・地理・人事の要素は，陰陽の主客，五行の生克というような論証の関係に照らして，互いに関連し合い，制約し合って，一つの複雑で膨大な体系を構成する。

奇門遁甲は，昔の人が排列や推算を根拠にして時と地を選ぶ，いわば一種の方術であるが，一旦様式が定まると，時空を超越し，永久に変わらず，完全に多くの要素の組み合わせの確率により確定・決定されるようになる。遁甲の学の具体的な応用の鍵は，遁甲盤に各要素を布き並べることである。遁甲盤は合わせて四つの階層からなる。つまり地盤（坎一・坤二・震三・巽四・乾六・兌七・艮八・離九），人盤（休・生・傷・杜・景・死・驚・開の「八門」），天盤（蓬・任・冲・輔・英・芮・柱・心・禽の「九星」），神盤（直符・螣蛇・太陰・六合・勾陳・朱雀・



地盤・人盤・天盤・神盤
（『奇門遁甲術』p 10 より）

九地･九天の「八神」）で，一定の規則によりその中の一つ或いは幾つかの盤が回転し，四つの盤の間の対応関係を使って，さまざまな変化を発生させ，それによって多くの違った構成を形成し，然る後にある一つの構成の中から相応の吉凶禍福を推算する。実際の操作の中で，各要素を排列する過程は非常に複雑である。

奇門遁甲の基本的な根拠は，後天八卦の方位を洛書九宮に配するものであり，さらに九星と八門とを配する。これは随意な組み合わせではない。人を中心として，上に天体からの宇宙の気の場があり，下に地球の磁場があり，この上下の場が，天体に作用する生物世界と交感し，異なる年月日時に違った変化を発生し，異なる格局を生み出すのである。古人は長期の体験と総括を通して，高度に抽象的な洛書九宮に基づく八卦・八門・九星を用いて，このような変化の中の格局の法則性を反映する。遁甲の学の言葉を用いて言えば，天盤は九星であり，人盤は八門であり，地盤は九宮・八卦である。

遁甲は，太乙・六壬と合わせて「三式」と称され，中国古代の方術文化の中でもっとも深遠な三つの学問であった。その中で奇門遁甲は，「天の時」「地の利」「人の和」を合わせて，複雑な排列推算を通じて，多くの要素の相互作用関係を総合し，それによって吉凶を判断し，戦略を決定する根拠として用いた。故に奇門遁甲は，中国古代の戦略を決定する科学の中で重要な地位にあった。

3　奇門遁甲の作盤の理論と方法

奇門遁甲の書は全て陽遁の九局を「順布六儀･逆布三奇」と言い，陰遁の九局を「順布三奇･逆布六儀」と言う。それぞれの順番が一巡すると陰陽の十八局となる。

『奇門遁甲術』（前掲）の中の「奇門止帰法[9]」（p 293～p 318）の説明を軸にしてその他各種解説書[10] の説明と比較参照しつつ，その共通する理論と方法をまとめると，次のようになる。

奇門遁甲を行うには，まず遁甲盤を作らねばならない。

その**第一段階**は地盤の六儀三奇を並べることである。

まず占いを行う時点の節気を確定し，六儀三奇（戊己庚辛壬癸丁丙乙）を順序に従って九宮に並べる。冬至の後には陽遁を用い，順に坎一宮よりはじめ（戊 1 己 2 庚 3 辛 4 壬 5 癸 6 丁 7 丙 8 乙 9），夏至の後には陰遁を用い，逆に離九宮より始める（戊 9 己 8 庚 7 辛 6 壬 5 癸 4 丁 3 丙 2 乙 1）。冬至の上元は陽一局なので，順遁で，戊（＝甲子）は一宮に起こり，己（＝甲戌）は二宮に，庚（＝甲申）は三宮に，辛（＝甲午）は四宮に，壬（＝甲辰）は五宮に，癸（＝甲寅）は六宮に，丁奇は七宮に，丙奇は八宮に，乙奇は九宮に並べる。この順序は先に述べた陽遁の「順布六儀・逆布三奇」である。夏至の上元は陰九局なので，逆遁で，戊（＝甲子）は九宮に始まり，己（＝甲戌）は八宮に，庚（＝甲申）は七宮，辛（＝甲午）は六宮というように，先に述べた陰遁の「順布三奇・逆布六儀」となる。

もし占いを行う時点が別の季節であったなら，その節気とその節気中の上元か中元か下元かによって，局数（陰遁何局か陽遁何局か）が違ってくるので，その数字を起点として，再び陽遁の「順布六儀・逆布三奇」，陰遁の「順布三奇・逆布六儀」の次第に従って並べていく。

例えば，もし占いを行う時点が春分の下元とすれば，「春分三九六」（春分は上元が三局，中元が九局，下元が六局を起点とするという意味）によって，六局であることがわかる。春分は冬至から夏至の間の節気だから，陽遁を用いるので，「陽遁六局」である。陽遁六局なので，陽遁の順儀・逆奇は六から始めて，戊己庚辛壬癸丁丙乙の順序に従って，順次洛書九宮に納れていく。すなわち，次のようになる。六儀の戊は乾六宮に入り，己は兌七宮に入り，庚は艮八宮に入り，辛は離九宮に入り，壬は坎一宮に入り，癸は坤二宮に入る（順儀）。三奇の丁は震三宮に入り，丙は巽四宮に入り，乙は中五宮に入る（逆奇）。

こうして地盤が完成する。

---

[9] 遁甲の研究者王立軍氏が，長年の間遁甲の学の起占布局の法の中から，精選して整理した，一種の簡単明瞭な要点をつかむ方法に基づく。

[10] 『奇門遁甲術』（前掲）以外に，比較検討のために参考にしたものは，王居恭『術数入門』（前掲），青龍隠士著，中村文総校訂『奇門遁甲原理口訣』（前掲），武田考玄『奇門遁甲学入門』（前掲），陳永正主編『中国方術大辞典』（中山大学出版社，1991 年）である。

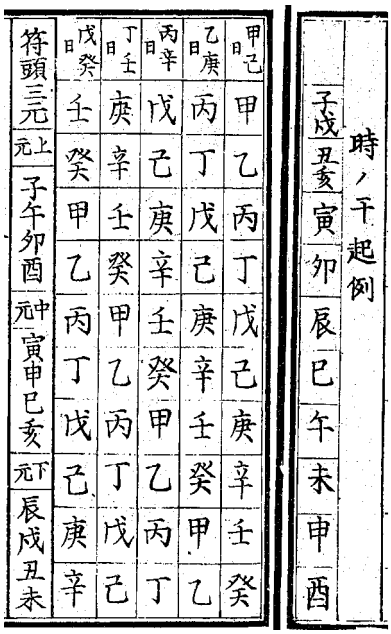
巽四宮 丙　奇	離九宮 辛(甲午)	坤二宮 癸(甲寅)
震三宮 丁　奇	中五宮 乙　奇	兌七宮 己(甲戌)
艮八宮 庚(甲申)	坎一宮 壬(甲辰)	乾六宮 戊(甲子)

第二段階は，九神を並べることである。いわゆる九神とは，すなわち直符，螣蛇，太陰，六合，勾陳，太常，朱雀，九地，九天である。九神は順序は一定しているが，定位がない。列星の運行は，もともと自然現象であるが，その九星と相応じて，九神が存在し，九神はそれぞれ司る所がある。なお九神は，日盤・時盤だけで，年盤・月盤には普通用いない。九神を並べるには，時干が必要である。時干とは，該当する用事時辰（占う事柄が実行される時間）の天干である。

この時干を求めて，すでに述べたように六儀三奇を並べる順序に従って，つまり冬至の後には陽遁を用い，順に坎一宮よりはじめ(戊１己２庚３辛４壬５癸６丁７丙８乙９)，夏至の後には陰遁を用い，逆に離九宮より始めて(戊９己８庚７辛６壬５癸４丁３丙２乙１)，その時干が地盤のどの宮に入るのかを確定し，然る後その宮の場所を直符の位置として九神を並べる。

例えば，春分の後，清明に近いある日に遁甲盤を布くには，まずその日が春分の後半五日に属するので，春分の下元である。「春分九三六」により，下元の格局は陽六局となる。陽六局の六儀三奇を並べる方法は，先述したように，六儀の戊を乾六宮に，己を兌七宮に，庚を艮八宮に，辛を離九宮に，壬を坎一宮に，癸を坤二宮に，三奇の丁を震三宮に，丙を巽四宮に，乙を中五宮に入れる。六儀三奇を並べたあとは，もしその日が庚寅の日で，正午の時分が用事であるならば，「時の干起例」（次頁）で，「乙･庚の日」の縦列と，「午」の横列が交差する所が「壬」なので，時干は「壬」であり，この時刻が壬午の時である事を知る。時干が壬であり，壬は地盤の坎一宮に当たるので，坎一宮に直符を入れ，九神の始まりはこの宮となる。九神の決められた順序に従って，坎一宮には直符を，坤二宮には螣蛇を，震三宮には太陰を，巽四宮には六合を，中五宮には勾陳を，乾六宮には太常を，兌七宮には朱雀を，艮八宮には九地を，離九宮には九天を入れる。ただし，九神ではなく八神を並べる方法もある。

上記の九神を並べる方法が飛宮法で，八神を並べる方法が排宮法である。飛宮法とは，九つの要素を九宮の数の順序に従って並べる方法であり，排宮法とは，八つの要素を，九宮の中五を除いた八枠を円盤に見立てて時計回り（一八三四九二七六）にまたは反時計回り（一六七二



（山川九一郎『奇門遁甲千金書』四丁裏・五丁表）

巽　四 六　合 （六合）	離　九 九　天 （勾陳）	坤　二 螣　蛇 （朱雀）
震　三 太　陰 （太陰）	中　五 勾　陳	兌　七 朱　雀 （九地）
艮　八 九　地 （騰蛇）	坎　一 直　符 （直符）	乾　六 太　常 （九天）

（括弧の中は八神を並べる場合）

九四三八）に回転させるように並べる方法である。八神の場合は，太常を除く直符，騰蛇，太陰，六合，勾陳，朱雀，九地，九天を，この順序で陽局なら時計回りに，陰局なら反時計回りに並べる。（山川九一郎『奇門遁甲千金書』は，この方式である。）

第三段階は，八門を並べることである。

八門とは，休門，生門，傷門，杜門，景門，死門，驚門，開門であり，八門には定位がある。

八門を並べる方法も，大体は排宮法と飛宮法の二つの系統に分かれる。排宮法では，八門の順序は休・生・傷・杜・景・死・驚・開となる。（山川九一郎『奇門遁甲千金書』は，やはりこの方式である。）

以下に紹介するのは，飛宮法の方である。

飛宮法で八門を並べる方法は，局数がすでに確定した後に，まず時干支が六十甲子の中のどの一旬にあるのかを見て，旬首（一旬の初め）を探し出す。例えば己巳の時は甲子の旬に属するので，その旬首は甲子である。まず戊を必ずその局数の宮に入れる。旬首の甲子は戊に遁するので，戊の宮の位置を確定したら，先に述べた六儀三奇の並べ方で，九干を各宮に入れる。戊の宮の位置を定位とする八門が，すなわち直使門であり，直使門が「転居」する方位が確定した後，休・死・傷・杜・中・開・驚・生・景の順序に従って，九宮の順序通りに入れ，定位とは異なる新たな八門の排列を形成する。

例えば前述の春分下元・陽六局の場合は，もし時干支が庚午ならば，庚午は甲子旬に属するので，旬首は甲子となる。陽六局なので，まず戊を乾六宮に入れる。旬首甲子は戊に遁するので，乾六宮の位置を定位とする門は開門である。すなわち開門が直使門となる。まず直使門の開門が「転居」する方位を確定するには，地支（ここでは午）と開門の定位（乾六宮，甲子から始まる）とを比べて，その地支が相対応する宮を探し出す。この宮がすなわち直使門開門の「新居」である。陽六局なので，順儀（六七八九……の順）を用いる。

地支：　子　丑　寅　卯　辰　巳　**午**　未

九宮：　乾六　兌七　艮八　離九　坎一　坤二　**震三**　巽四

陽六局なので，乾六宮と対応する地支（子）を第一番目として，以後，地支の順序（子丑寅卯……）とこの盤の順儀の宮（六七八九……）とを対応させる。時は庚午で，午と対応する宮は震三宮なので，直使門開門は定位である乾六宮から震三宮に「転居」する。その後，その他

巽　四 杜門(原) **驚門(新布)**	離　九 景門(原) **傷門(新布)**	坤　二 死門(原) **中門(新布)**
震　三 傷門(原) **開門(新布)**	中　五 **生門(新布)**	兌　七 驚門(原) **休門(新布)**
艮　八 生門(原) **死門(新布)**	坎　一 休門(原) **杜門(新布)**	乾　六 開門(原) **景門(新布)**

の門もこれに従って「転居」する。門の排列の順序は変わらず，ただ開門を始めとするに過ぎないので，開・驚・生・景・休・死・傷・杜・中となる。これと対応する八卦九宮は震三から始まり，三四五六……の順に従って並ぶので，開門から始まる八門の列と，震三から始まる八卦九宮の列は次のように対応する。

震三	巽四	中五	乾六	兌七	艮八	離九	坎一	坤二
開	驚	生	景	休	死	傷	杜	中

第四段階は九星を並べることである。

九星の順序は，蓬・芮・冲・輔・禽・心・柱・任・英（すなわち天蓬星・天芮星・天冲星・天輔星・天禽星・天心星・天柱星・天任星・天英星）である。九星を並べる方法は八門を並べる方法とさほど変わりはない(どちらも飛宮法の場合)。局数がすでに確定した後に，まず時干支が六十甲子の中のどの一旬にあるのかを見て，旬首を探し出す。その後に，その旬首(甲 X)が遁する六儀を局数の宮に入れる。さらにその宮を起点にして，六儀三奇を陰遁・陽遁の順序に従って各宮に入れた後に，旬首がある宮を定位とする九星を直符とする。「直符」とは，『遁甲演義』(奇遁布局法「九宮已に布く，方に其の時･旬頭の甲の何宮に在るかを点出し，其の星を以て直符と為し，その門を以て直使と為す。」）によれば，天盤の九星のうちの当直の星の符であり，それが第二段階ですでに述べた九神の一つの「直符」と重なることになる。然る後に，八門を並べるのと似たような方法によって，九星を並べる。ここで注意することは，八門を並べるには直使門を基準とし，用いるのは地支である。九星を並べるには直符を基準とし，用いるのは天干である。直使と直符は相対応し，八門と九星もまた相対応するが，この対応はまた，時干と時支の統一を表している。これが遁甲の学における，「毎(つね)に蓬九星を直符と為し，八門直使は自づから分明なり。[11]」の二句である。

例えば，春分下元に遁甲盤を布く場合は，格局は陽六局である。時干支は壬午とすると，甲戌の旬に属し，甲戌は己に遁する。陽六局なので，まず戊を乾六宮に入れ，六儀三奇を順に並べると，旬首甲戌の遁する己は兌七宮にある。兌七宮を定位とする九星は天柱星である。すなわち天柱星が直符である。直符が「転居」する方位が確定した後，蓬・芮・冲・輔・禽・心・柱・任・英の順序に従って，九宮の順序通りに入れ，定位とは異なる新たな九星の排列を形成する。戊は乾六宮にあり，己は兌七宮にあり，庚は艮八宮にあり，辛は離九宮にあり，壬は坎一宮にあり，癸は坤二宮にあり，丁は震三宮にあり，丙は巽四宮にあり，乙は中五宮にある。時干が「壬」なので，兌七宮の天柱星が，壬のある坎一宮に「転居」することがわかる。直符の宮が決まると，その他の九星も順序に従って各宮に入る。直符の天柱星は，兌七宮から坎一宮に移り，天任星は艮八宮から坤二宮に，天英星は離九宮から震三宮に，天蓬星は坎一宮から巽四宮に，天芮星は坤二宮から中五宮に，天冲星は震三宮から乾六宮に，天輔星は巽四宮から

[11]『煙波釣叟歌』に「九宮甲に逢ふを直符と為し，八門直使は自づから分明なり。」とある。

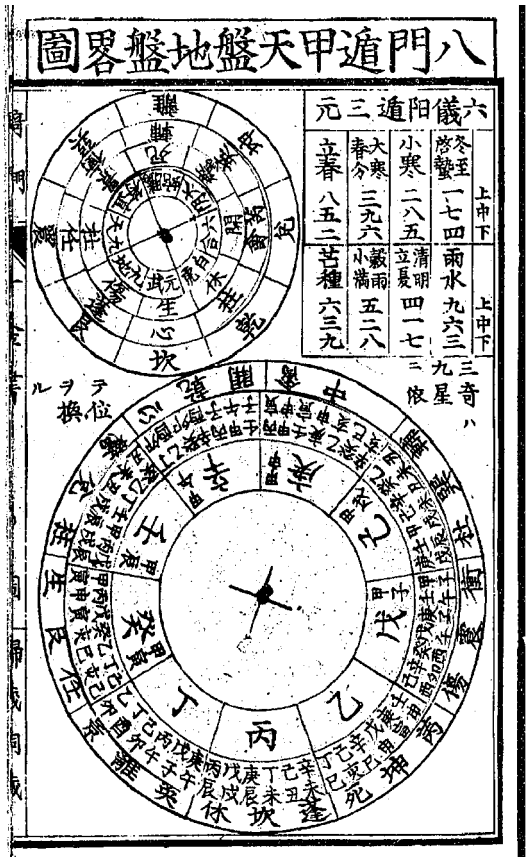
兌七宮に，天禽星は中五宮から艮八宮に，天心星は乾六宮から離九宮に移る。

第五段階は，天盤の六儀三奇を並べることである。

天盤の六儀三奇も，陰遁・陽遁の格局によって配布されるが，地盤の六儀三奇を並べるのと異なる点は，それは九星の中の天心星を基準とする。九星を並べた後，天心星がある宮を捜し，六儀三奇はその宮を初めとする。下の図の例では，天心星は離九宮にあるので，すなわち離九から戊を始め，陽遁の順儀逆奇によって，次のように並べる。戊は離九宮に，己は坎一宮に，庚は坤二宮に，辛は震三宮に，壬は巽四宮に，癸は中五宮に，丁は乾六宮に，丙は兌七宮に，乙は艮八宮に入る。

改めて山川九一郎氏の『奇門遁甲千金書』に「大圖を地盤と云。其の第一は，八門方位にして九星の配當，第二は六十干支の配當，第三は六儀三奇の配當なり。上の圖を天盤と稱す。其の第一は八方位にして，地盤の八門三奇，此の天盤にうつりて位を換へ，吉格を定むる用に供す。第二は九星にて，直符に用ゆ。第三は八門にして，直使に用ゆ。第四は八詐門と云ふ。圖中，坎に蓬・休，離に英・景と記するは，天蓬・休門・天英・景門等にて，天と門との稱あれども，簡略を旨とすれば，之を畧す。八門は，休・開・生，九星は，蓬，心，任，英を吉とし，八詐門は，陰，合，地，天の四つを吉とす。」（二丁裏・三丁表）と説明されている「八門遁甲天盤地盤畧圖」（八丁表・八丁裏）を見てみると，下の図（地盤）が九枠・三層の円盤で，上の図（天盤）が八枠・四層の円盤で，二つとも糸で綴じられて可動式の回転盤になっている。上の図（天盤）では，反時計回りに坎一・乾六・兌七・坤二・離九・巽四・震三・艮八と並ぶ排宮法の順序になっている。下の図（地盤）では，反時計回りに坎一・坤二・震三・巽四・中五・乾六・兌七・艮八・離九と並ぶ飛宮法の順序になっている。そしてこの地盤には飛宮法の順序で九星と八門の定位が示されているわけだが，占いの操作（定位からの移動先，「転居」）を示す天盤には九星・八門・八詐門（八神）が配され，いずれも排宮法で並んでいる。特に顕著な

巽　四 天輔(原) **天　蓬**	離　九 天英(原) **天　心**	坤　二 天芮(原) **天　任**
震　三 天冲(原) **天　英**	中　五 天禽(原) **天　芮**	兌　七 天柱(原) **天　輔**
艮　八 天任(原) **天　禽**	坎　一 天蓬(原) **天柱(直符)**	乾　六 天心(原) **天　冲**



（山川九一郎『奇門遁甲千金書』八丁表）

のは八門の並び順で，排宮法ではこの上の図（天盤）のように休・生・傷・杜・景・死・驚・開の順で回転移動させるが，もし飛宮法ならば休・死・傷・杜・中・開・驚・生・景の順になるはずである(先述の第三段階を参照)。しかし，この天盤においては飛宮法で排列することは考えられていないので，山川氏の占い方は，九星・八門・八詐門（八神）を全て排宮法で並べる方法を採っていることが分かる。

4　各々の星・門・神の主に司るもの，及び吉格・凶格

遁甲盤を並べ終えた後，その運用の仕方は，比較的複雑である。遁甲の学の書籍には，幾つかの異なる方法が書かれている。

遁甲盤の実際の応用の問題では，まず盤上の各々の九星・八門・九神の司る事柄や，その組み合わせの相互関係を明白にすることが必要である。以下の説明は，『奇門遁甲術』（前掲）による。

九星に関して ――

天蓬星：極めて不思議な計略を指し，また頭を悩ませることと理解される。

天芮星：兵站（後方勤務）の保障のことを指し，財力や物力を消耗することと見なされる。

天冲星：攻撃の力量を指し，現代社会における競争的な事宜に相当する。

天輔星：戦争を取り巻く周囲の環境で，のちに文化教育方面の事と見なされる。

天禽星：敗戦。ある奇門学派は「黄五殺」なので，用いるなかれ，と見なす。

天心星：兵法の哲学の背景を指し，のちには学術方面のことと見なされる。

天柱星：潰滅的打撃を指し，かなり強烈な破壊の力と見なされる。

天任星：困難を耐え忍ぶ行動を指す。わりと穏やかな事や，忍耐しなくてはならない事に相当する。

天英星：士気を高めることを指し，心理要素の方面のことに相当する。

九星を運用する上での利害取捨は，八門との配合を見る。九星と八門との配合には，各々利害があり，一般に，どの九星も死門と配するべきではない。天の星がいくら良くても，合わない門を配すると，古代の奇門家も効力を失うと考える。

八門に関して ――

休門：偽装隠蔵の場所である。後に変化して吉門となり，また「水神貪狼」と名づけられ，職を求め財を求め，及び嫁に出したり嫁を取ったりすることを主り，万事吉である。

生門：水や草が豊富で，地味豊かな場所である。後に変化して凶を吉に変える門となり，また「土神左輔」と名づけられ，この門の吉は休門より大きいと考える者もいる。

傷門：資源が不足し，兵馬受難の場所である。後に「木神禄存」と名づけられる。ある奇門学派はこの門は用いてはならず，これを用いれば災いや争いが多いと考える。

杜門：兵馬が休養を取り整備する場所である。後に「水神文曲」と名づけられる。この門は出かけていって，貴人に謁したり，財を求めたりするのによろしいと考えられる。避難したり，引越をしたりする事に，杜門の日を用いてはならない。

景門：平坦で日当たりのよい場所である。後に「火神廉貞」と名づけられる。この門は出かけること，貴人を訪ねること，博奕，狩猟・漁撈によろしいと考えられている。

死門：包囲殲滅される場所である。また「土神巨門」と名づけられる。ある奇門学派は，この門はただ猟に出るのに用いるだけで，その他の諸事にはおおむね用いてはいけない，と考える。

驚門：危険で障害の多い場所である。また「金神破軍」と名づけられる。この門は用いてはならず，事を引き受けると不吉で，いたずらに心配事・悩み事が増えると考えられている。

開門：兵馬が展開すべき場所である。後に「金神武曲」と名づけられる。この門は，宮殿に上って貴人に会うのによく，これを用いれば大吉であると考えられている。

八門の四字の別名は，その五行の属性を代表しており，例えば杜門の「水神文曲」はこの門が水に属することを表し，この名がその他の諸元素との，五行生克・制化の関係を決定づけているのである。八門を比較すると，休・生・開・景の四門が吉で，その他の四門が不吉である。吉門の中で比べれば，開門が最も吉で，次いで生・休・景門である。

八門が九神に配する事に関して ──

八門と九神との組み合わせの中では，門が主となり，神が輔となる。門と神とを配する事で吉凶を見る。直符は八神（または九神との説がある）の頭領であり，上吉である。ただ，五黄殺（五黄土星のある方位を五黄殺という。大凶の方位である。）に遇うと凶に転ずる。八神の中で直符は大吉であり，六合がこれに次ぎ，九天がこれに次ぎ，以下，太陰，九地の順である。螣蛇，勾陳，朱雀は凶である。

天盤と地盤に関して ──

遁甲における天盤と地盤は天干によって生じ，三奇を主とする。天盤はとりわけ，三奇を用いる事を主とする。昔から，乙奇は家や情緒を安定させ，生産や治療に対してよい所がある。丙奇は，地位・職業・財理に対してよい所がある。訴訟を起こしたり，外国を訪問することによろしい。丁奇は学術・文化教育の方面のことを指し，試験の時に占って丁奇を得ると，一定の効果があると考えられる。三奇の中には，なお専用の日があり，たとえば甲・己の日は乙奇を使い，丙•辛の日は丙奇を使うと当然よろしいが（『奇門遁甲大全』の巻十五，三奇貴人陞殿格に「三奇専使格，甲己日乙奇，丙辛日丙奇，乙庚日丁奇，丁壬日乙奇，戊癸日丁奇」とある。），やはり，それは場合による。

三奇は八門に配合されるが，三奇と門とでは，門を主とする。もしどうしてもよい門と配合しない場合は，三奇は用いないのが最も良い。遁甲の学で言われているように，乙・丙・丁の三奇は，開・休・生の三門がなければ，吉であっても用いるべきではない。三つの吉門が至れば，三奇が至らずともなお，用いるべきである。もし事が緊急であるなら，門を取って奇を棄てる。

九宮星・八神に関して ──

九宮星とは，すなわち一白，二黒，三碧，四緑，五黄，六白，七赤，八白，九紫で，これは天体の影響が地球上に及ぼす九種類の状況を示す。この九種類の状況は，節気の時刻によって変わっていくが，その移動の順序は，決まった順序で動くものである。奇門学派の中の三元派の考え方によれば，九宮星の中で最も凶であるものは五黄であり，また「五黄殺」と称す。五黄殺の向かい側の宮は「暗剣殺」と呼ばれ，これも凶兆を表す。三元派は，遁甲盤を用いて方位を選ぶ時，その他の星神が吉か凶かに関わらず，ただ「五黄殺」があれば，その方位は吉凶を考える余地なく凶である。同時にその向かい側の「暗剣殺」の方位も，吉凶を考える余地なく凶である。例えば，五黄が離九宮に進むと，離九宮は真南を表わすので，占ってもらう人は（五黄殺なので）真南に行ってはいけない。同時に真南と相対する真北にも（暗剣殺なので）行っ

てはならない。

吉格・凶格に関して ──

六儀・三奇・九星・八門・九神の配置は，遁甲の学の中に多くの「吉格・凶格」を生み出す。いわゆる「格」は，数学の公式に相当するものである。儀・奇・星・門・神はみな五行の属性を帯びており，それらは洛書九宮においてある宮と組み合わせることで，生克・制化の関係を生み出し，それによって吉凶･休咎の結果が出る。古人はあらかじめ，五行とそれぞれの「格」の組み合わせの形式を固定して，次のように公式化した。

五　行	八　門	九　星	八（九）星	九　宮
金	驚門・開門	天心・天杜	六白・七赤	陽六・陰七
木	傷門・杜門	天冲・天輔	三碧・四緑	陽三・陰四
水	休門	天蓬	一白	一
火	景門	天英	九紫	九
土	生門・死門	天芮・天禽・天任	二黒・五黄・八白	陰二・陰五・陽八

「格」には吉格と凶格とがあり，吉格の中で最も重要なものは，いわゆる「奇門九遁」であり，九種類の吉利の星門の配置であり，それぞれ用途がある。凶格の中の主要なものはいわゆる「奇門八凶」であり，天盤・地盤における，六儀三奇と星と門との対応によって凶が定まる。今それを分類して述べると次のようになる。

奇門九遁について ──

天遁：凡そ天盤が丙奇で，八門は生門に臨み，地盤は戊である。

地遁：凡そ天盤が乙奇で，地盤は己であり，八門は開門に臨む。

人遁：凡そ天盤が丁奇で，八門は休門であり，八神は太陰である。

神遁：凡そ天盤が丙奇で，八門は生門であり，八神は九天である。

鬼遁：凡そ天盤が丁奇で，八門は休門であり，八神は九地である。

風遁：凡そ天盤が丙奇で，八門は開門であり，東南の方位に臨む。あるいは，天盤は辛儀であり，八門は休門あるいは生門であり，地盤は乙である。

雲遁：凡そ天盤が乙奇で，八門は開門であり，西南の方位に臨む。あるいは天盤が乙奇で，八門は開門であり，地盤は辛である。

龍遁：凡そ天盤が乙奇で，八門は休門であり，地盤は癸であり，あるいは北方である。

虎遁：凡そ天盤が乙奇で，八門は生門である。あるいは天盤が辛儀で，八門は生門であり，

東北の方位に臨む。

この九遁は方位を選ぶ吉格である。そのほかにまだ二つの吉格がある。すなわち青龍回首格（天盤が戊儀で，地盤が丙奇）と飛鳥跌穴格（天盤が丙奇で，地盤が戊儀。あるいは天盤が丙奇で，地盤が乙奇）である。

奇門八凶に就いて ――

伏宮：天盤が庚であり，地盤が戊であり，八神は直符である。

飛宮：天盤が庚であり，日干が午である。

青龍逃走：天盤が乙であり，地盤は辛である。

白虎猖狂：天盤は辛であり，地盤は乙である。

螣蛇夭矯：天盤は癸であり，地盤は丁である。

朱雀投江：天盤は丁であり，地盤は癸である。

熒惑入白：天盤は丙であり，地盤は庚である。

太白入熒：天盤は庚であり，地盤は丙である。

凶の格局はまだ多くの種類があるが，一般にはこの「八凶」が比較的頼りになる。「八凶」のうち，庚儀と関係のあるものがその四を占めている。一般に，庚の格局は比較的不利である。天盤の飛宮（九星の移動）で庚に出会うと，天災を主ることが多い。庚の使う門は，人間の不幸の事を主ることが多く，加えて地盤ならば，地質上の不利な要素がある。その他に庚と無関係な「四凶」は，『煙波釣叟歌』の言い方に照らせば，「奇儀相克」に属する。乙奇と辛儀の関係や，丁奇と癸儀の関係が，このようなものである。

5　まとめ

奇門遁甲は方位学（空間の学，洛書学）であり，干支学（時間の学，暦学）でもあるので，時間と空間を統合した術数の学と言える。さらに，空間を洛書に従って九つに分け，時間を六十干支に従って六十に分割し，独自の世界観を構築している。また，九神・九星が天，九宮が地，八門が人という，「天・地・人」をイメージした世界を構成している。

ただし山川九一郎『奇門遁甲千金書』の「八門遁甲天盤地盤畧圖」では，天盤と地盤しかなく，天盤の中に八門が入っており，「人」の要素が含まれている。また地盤は飛宮法で並んでおり，天盤は排宮法で並んでいる。山川氏の方法は天盤に九星・八門・八詐門（八神）を全て排宮法で並べ，吉格・凶格の状況を全て天盤で見ることができるように簡便にしている。これは奇門遁甲の方法が複雑なので，なるべく簡便にしようと山川氏が工夫したのであろう。

山川九一郎『奇門遁甲千金書』の全体の解明作業及びその実際の手順（占い方）は，別稿（「山川九一郎『奇門遁甲千金書』について」，『中国哲学』第 38 号，北海道中国哲学会，2010 年）に報告するので，そちらをご参照いただきたい。

（いの　たけし・言語文学専攻）